

子育て支援センターを利用する母親の意識

水内 豊和¹・林 千津子¹・七木田 敦²

The Awareness of Child Rearing Mothers Who Participated in Child Rearing Support Center (CRSC)

Toyokazu Mizuuchi¹, Chizuko Hayashi¹ and Atsushi Nanakida²

The present study analyzed the effect of participating in the Child Rearing Support Center(CRSC) on marital quality, parenting stress, and the feeling of child rearing. The subjects were mothers who participated in CRSC for two hours a week. We examined the items of the questionnaire based on Kitagawa et al. (1995). The subjects of the questionnaire were 81 mothers who have infants from 0 to 6 years old. The results are as follows: CRSC contributed to rearing of the mothers. Especially, the teacher of CRSC and other mothers were key persons to support to buffer the mothers' stress from child rearing. Mothers who perceived their neighborhood as an important social support coped with their stress and they were in good mental condition. In future research, it will be necessary to consider various factors that may clarify the effects of social support.

Key words: child rearing support center, social support, parenting stress, mental health

I. はじめに

従来、母親は子どもに愛着を抱きつつその成長を支援する役割であると認識されてきた。しかし、1970年代の後半から1980年代の前半にかけて、母親の間には、育児に悩みやストレスを覚え、子どもの存在や成長に喜びを感じられず、育児態度に適切さを欠くという現象も存在することが注目されるようになった。柏木・若松(1994)も、幼児を持つ母親は、子どもや育児への肯定的な感情を強く感じながらも、これとは逆に子どもの存在や育児に対して否定的な感情をも感じることを報告している。

大日向(1985)は、現代の母親は育児と自己の生き甲斐との間に葛藤が大きく、育児に専念することで社会からの疎外感や焦燥感を強めていることを明らかにした。また、それが育児疲労や育児ノイローゼに

つながる傾向を含んでいることを明らかにした。

以上のような問題への対応として、育児不安や育児ストレスの様々な背景要因が検討され、育児の男女共有、夫婦関係の確立、育児への社会的支援の必要性などが指摘されている。田中(1994)は、母親の育児不安を軽減する要因として、夫との親密度の高さや家庭外のソーシャルサポートがあげられることを明らかにしている。

ソーシャルサポートとは、家族、友人や隣人などの個人をとりまくさまざまな人々からの有形、無形の援助をさすものであり、Caplan(1974)によって概念化された。

ところで、1995年より、多様な保育ニーズに応えるべく打ち出された施策のひとつである「子育て支援センター事業」は、地域に開かれた子育ての総合的な支援センターとして機能することが期待されている。「子育て支援」というテーマに関して、たとえば、育児サークル参加や種々の育児支援施設などのソー

1 広島大学大学院教育学研究科博士課程前期

2 広島大学教育学部附属幼年教育研究施設助教授

シャルサポートを利用することにより、母親の育児不安やストレスが軽減するという効用を明らかにした研究などは、近年の保育関係の雑誌論文や学会報告などに実践報告として多数されている。しかし、制度上実施されている「子育て支援センター事業」について、他のサポート源と比較して効果の程度を明らかにする研究や、母親の育児ストレス・その他の精神的健康状態と関連して実行されるサポートの効果について言及した研究はほとんどない。

そこで本調査では、子育て支援センターを利用する母親が、養育上のストレスを軽減するためにどのようなサポートを活用し、またそれがどのような効果をもつのか、および子育てに際しどのような心の支えを必要としているのかを明らかにする。そしてよりよい子育て支援のあり方を考えていくための基礎的な資料を得ることを目的とする。

Ⅱ. 方 法

1. 調査対象

調査の対象としたのは、H市内のA保育所でおこなっている子育て支援センターに登録・利用している母親(約180組)である。A保育所の子育て支援センター事業は、専任の保育者2名のもと、週4回午前中におこなわれており、その内容は育児に関する不安や悩みについての育児相談、ゲーム遊び、造形やお菓子づくりなどの母子での遊び中心の活動、講演会や各種子育て情報の提供などである。

2. 調査手続き

1999年6月から7月末までの間、子育て支援センターに登録・利用する母親に、子育て支援センターにて質問紙を直接配布し、母親が後日郵送したものを回収した。総配布数は180部、うち回収数は81部(45%)、有効回答数も81部(45%)であった。

3. 調査内容

調査内容は、北川・七木田・今塩屋(1995)が、母親のソーシャルサポートの影響に関する研究の際に用いた質問項目を、子育て支援センターを利用する母親の育児環境に即して一部修正したものを使用した。それは、母親のストレスや種々のサポートが体系的に把握できるまとまった質問紙であることによる。具体的には、以下のような内容を含む質問項目から構成されている。

(1) 個人的背景要因：子どもの年齢および性別、母親と父親の年齢、母親の職の有無、子どものきょうだい、祖父母との同居、居住地域の7項目からなる。

(2) 養育上のストレス(PSS)：母親が子どもを養育していく際に生じるストレスの頻度を、新見・植村(1980)、中塚(1984, 1985)、佐々木・高梨・鈴木(1990)等を参考に作成した10項目を4件法で評定した。

(3) 精神健康度(GHQ)：中川・大坊(1987)による「日本版一般健康調査質問紙短縮版」30項目4件法を使用した。

(4) ソーシャルサポート：①知覚されたサポート(2種類)と、②実行されたサポート(1種類)からなる。これはBarrera(1986)の提示した分類概念である。知覚されたサポート(perceived support)とは、主観的に知覚された経験としてのソーシャルサポート、実行されたサポート(enacted support)とは、実際に受けた援助的な行為としてのソーシャルサポートと、それぞれしている。

①知覚されたサポートとして、ひとつは「夫婦親密性サポート(MIS:6項目4件法)」を使用した。これは、Hisata, Miguchi, Senda & Niwa(1990)等を参考にしており、母親が感じている夫との日頃の様子を評定するものである。もうひとつは「家族サポート(FSS:15項目4件法)」を使用した。これは、Dunst, Jenkins & Trivette(1984)のThe Family Support Scaleを翻訳・一部修正したもので、17のサポート源別に、日頃母親が子どもを育てる上でのサポートの程度を

表1 母親の個人的背景要因の内訳

	平均	(SD)
母親の平均年齢	31.7 [歳]	(4.2)
子どもの平均年齢	31.9 [ヵ月]	(11.7)
母子の年齢差	29.0 [歳]	(4.1)
夫婦の年齢差	2.0 [歳]	(2.9)
子育て支援センター利用回数	5.2 [回]	(4.1)

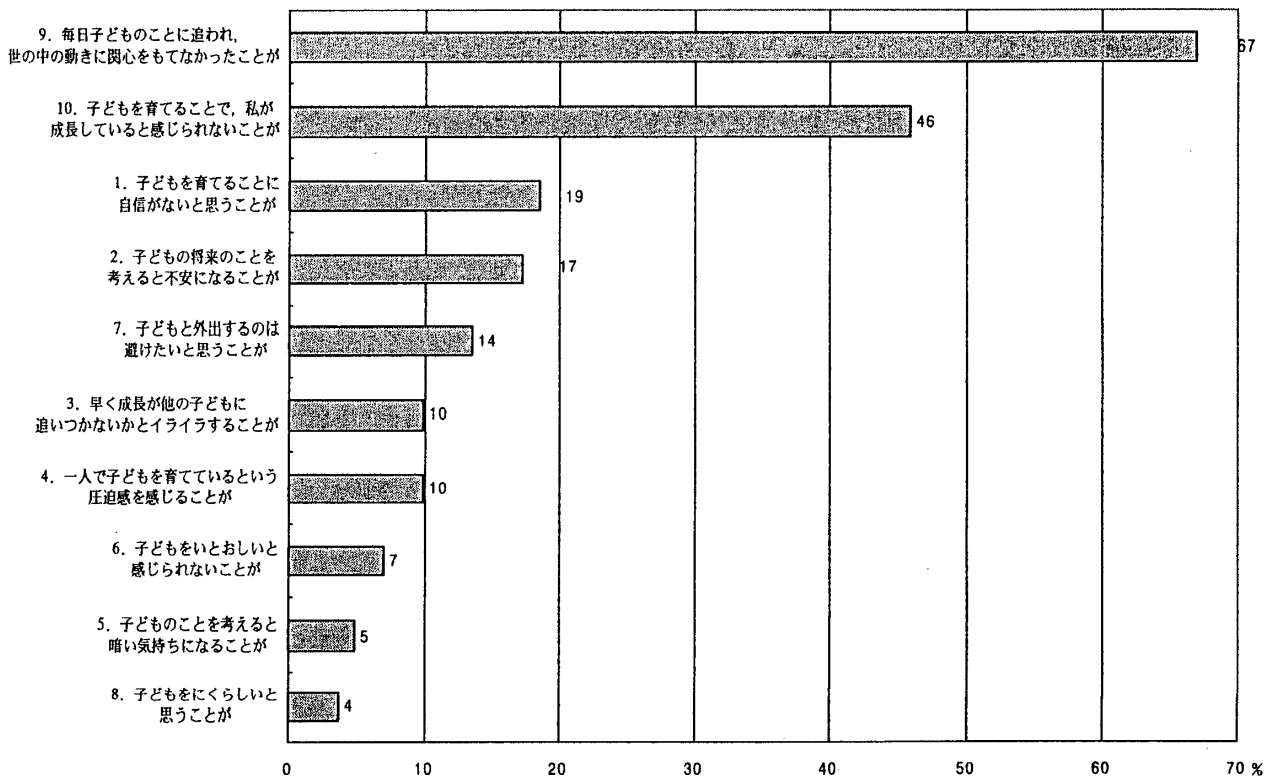


図1 母親の養育ストレス (しばしば/いつもあった)

「全く助けにならない～とても助けになる」の4段階で評定するものである。なお、該当するサポート源がない場合も考えられることから、先述の4段階の他に「なし」の解答欄も設けた。

②実行されたサポート (ISSB) は、11項目4件法からなる。これは、Barrera, Sandler & Ramsay (1981) によるThe Inventory of Socially Supportive Behaviorsの40項目中、情緒的・情動的サポートとして抽出された項目 (Stokes & Wilson, 1984) を翻訳したものである。

Ⅲ. 結果および考察

1. 母親の個人的背景要因

母親の個人的背景要因について表1に示した。以下に各項目について検討する。

(1) 母親の属性

今回対象とした母親の居住地は、全員がH市内であった。母親の年齢は、20代後半から40代前半まで見受けられた。最も多かった年齢群は30代前半 (平均31.7歳) であった。

また、利用している母親の88%が専業主婦であった。

(2) 子どもの属性

子どもの年齢では、主に1 (22%)、2 (32%)、3 (25%) 歳のいわゆる幼稚園就園前の年齢の子どもの多い。これは、子どもがこの年齢の時期に、母親の子育ての不安が高く、子育ての情報を得るため子育て支援センターを利用していると考えられる。

きょうだいについてみると、一人っ子が37%と最も多く、次いで中間子 (26%)、長子 (19%)、末子 (5%) となっており、一家庭で最も多い子どもの数は4人であった。末子を持つ母親の利用が一番少ないのは、このころには、既に母親の育児上の経験知がある程度確立しているからと思われる。

(3) その他の項目

祖父母との同居をしている家庭は7%と非常に少なかった。一人っ子が多いこととあわせて、核家族化、少子化といった社会背景がうかがえる。

2. 母親の養育ストレス

母親の養育ストレスをたずねた10項目について結果をまとめたのが図1である。

ストレスを持つことが「しばしば/いつもあった」という意見が多かった質問項目は、順に「毎日子どものことに追われ、世の中の動きに関心をもてなかったこと」(66%)、「子どもを育てることで、私が成長

していると感じられないこと」(46%)が突出しており、ついで「子どもを育てることに自信がないと思うこと」(19%)、「子どもの将来のことを考えると不安になること」(17%)となっていた。数井・無藤・園田(1996)は、育児ストレスを、子どもを持ったことでの生活の変化からくる親ストレスと、子どもの発達・成長に関する悩みや心配、子どもの行動特徴に対する子ストレスとに大別し、48組の母子を対象として検討した。その結果、親ストレスは子ストレスと関連がみられず、さらに、子ストレスよりも有意に高いことが見出された。これは本調査から得られた結果と一致するものである。本調査において対象となった母親の多くは専業主婦であり、家庭における子どもと密に接する時間が比較的長いと考えられる。また、子どもも就園前であるため、まだ日常生活の中で母親の援助を必要とする機会が多いと予想される。このことから、母親は自分のことよりもまず子どものことを優先させる必要性に迫られ、加えて子どもとの密に接する時間の長さは、そのような機会を増大させるものであると考えられる。その結果、親ストレスが高まるのではないかと推測される。

逆に「子どもをにくらしいと思うこと」(4%)、「子どものことを考えると暗い気持ちになること」(5%)、「子どもをいとおしいと感じられなかったこと」(6%)という母親の自己効力感とも取れる質問項目に「しばしば/いつもあった」という意見が少なかったことから、先述の子ストレスを感じるという回答が少なかった結果と一致している。

また、「早く成長が他の子どもに追いつかないかとイライラすることが」あると答えた母親は10%であった。子育てに際し、祖父母の関与がなく、専業主婦として家庭保育を主とする母親が多い割に、子どもの成長にあせりや苛立ちを感じることなく育児をしている様相がうかがえる。この背景には、核家族という形態が、むしろ母親独自の育児観が育児に反映されやすいなどのプラス面を有しているとも考えられよう。

3. 母親の精神健康度

母親の精神的な健康の程度を測定する計34項目は、次の3つに分類される。(1)質問項目の1~15および25~28は、母親の精神的健康にマイナスに作用する事柄の頻度について調査する項目である。母親が日頃感じているストレスの程度を表したものである。(2)質問項目の16~24は、逆に精神的健康にプラスに作用する事柄の頻度について調査する項目である。(3)質問項目の29~34は、精神的健康に影響を与え

る事柄が日常にどう反映されているかを調査する項目である。

(1)、(2)については「しばしば/いつもあった」、(3)については「よくできた/普段どおりできた」と回答した割合の高かった項目を順に、それぞれ図2、3、4に示した。以下に各観点から結果をまとめ、考察する。

(1) 母親の精神的健康にマイナスに作用する事柄の頻度(図2:上位7項目)

結果から、「たえずストレスを感じたことが」ある(21%)と回答した母親が最も多く、また「自信を失ったことが」ある(17%)も上位であった。このことから、他の質問項目のように理由が明確ではない、漠然としたストレスや不安を感じている母親像が予想された。

(2) 母親の精神的健康にプラスに作用する事柄の頻度(図3)

結果から、5項目について、半数以上の母親が最近、精神的健康にプラスに作用するような事柄があったことが明らかとなった。特に、外出した、活動的な生活を送れた、まわりの人々に親しみや暖かさを感じたといった回答に「ある」とした母親が多くみられたことから、子育て支援センターを利用している母親は、自分と子どもとの密な関係のみの状態から積極的に対外的になろうとする姿勢が感じられた。

(3) 精神的健康に影響を与える事柄が日常にどう反映されているか(図4)

結果から、「いつもより、まわりの人々とうまくつきあっていくことが」(98%)、「問題があった時、いつもより積極的に解決しようとするのが」(95%)、「いつもより、日常生活を楽しく送ることが」(94%)に「よくできた/普段どおりできた」と回答する割合が非常に高かった。この結果は(2)の考察を支持するものであり、日常生活への積極的な姿勢が充実した生活上の機会を多くしていると考えられる。

これらのことから、子育て支援センターを利用する母親は、漠然としたストレスや不安を抱えつつも、積極的に日常生活を楽しく送ろうと心がけ、またその結果生活を充実したものにできていることが予測された。

4. 夫によるサポート(夫婦親密性サポート)

夫婦の親密性をたずねた6項目について結果をまとめたのが図5である。これは、母親に対してのサポート源のひとつである、夫との日頃の様子を評定するものである。

それぞれの質問に対し、「しばしば/いつもあっ

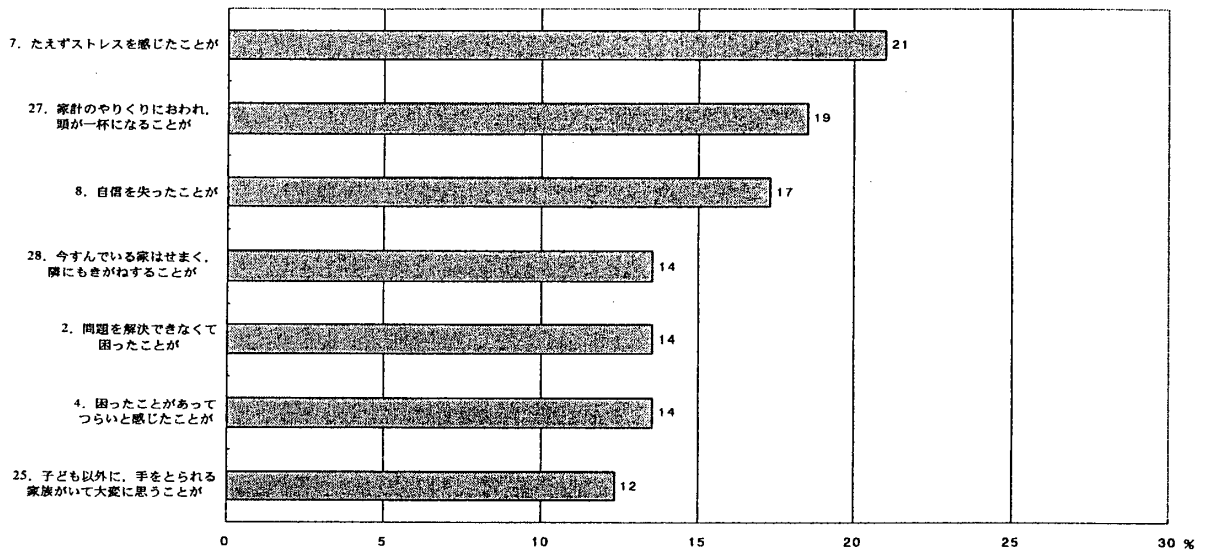


図2 母親の精神健康度 (1) (しばしば/いつもあった)

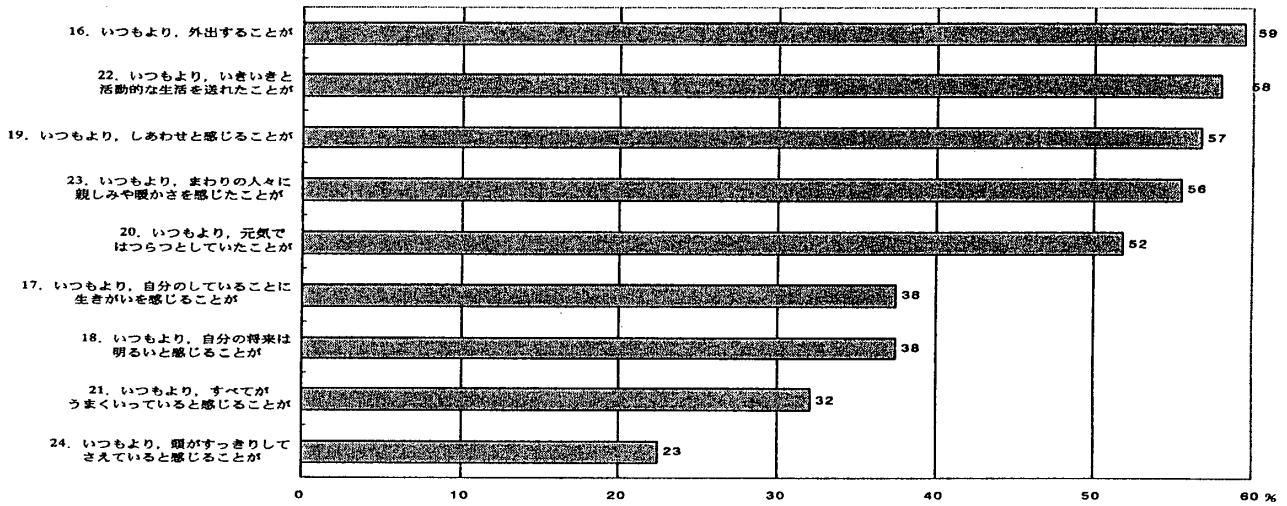


図3 母親の精神健康度 (2) (しばしば/いつもあった)

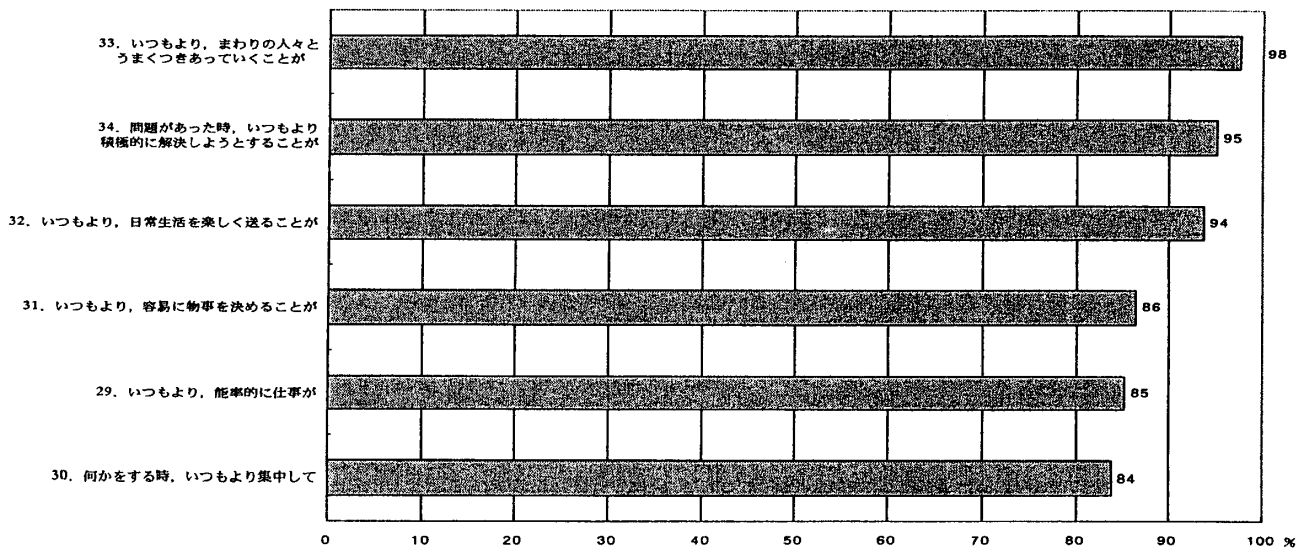


図4 母親の精神健康度 (3) (よくできた/普段どおりできた)

た」と肯定的な回答した割合が最も高かった項目は、「全般的に、今の夫婦関係に満足している」(41%)であった。しかし、「じっくり話し合う」、「お互い理解し合えていると思う」、そして「お互いの心の強い結びつきを感じる」という質問項目に「しばしば」を除く「いつも」という回答がそれほど多くなかった(それぞれ12, 16, 22%)。このことから、夫婦で時間を共有したり、漠然と助け合うといった表面的なサポート関係ではなく、内面的・共感的なレベルにおいて夫婦が理解し合えているかということには、若干の疑問が残る結果であるといえよう。

5. 種々のサポート(家族サポート)

母親が育児に際し、どのようなサポートをどの程度活用しているかを17のサポート源について4件法で質問した。各サポート源について、「少し/とても助けになる」と回答した母親の割合をまとめたのが図6である。

活用されたサポート源として高い回答数を得たものは、順に「夫」(85%)、「子育て支援センターの保育者」(84%)、「子どもを通して知り合った人」(81%)、「近所の人」(79%)、「医療機関」(75%)、「私の両親」(73%)であった。夫がもっとも高い回答率を

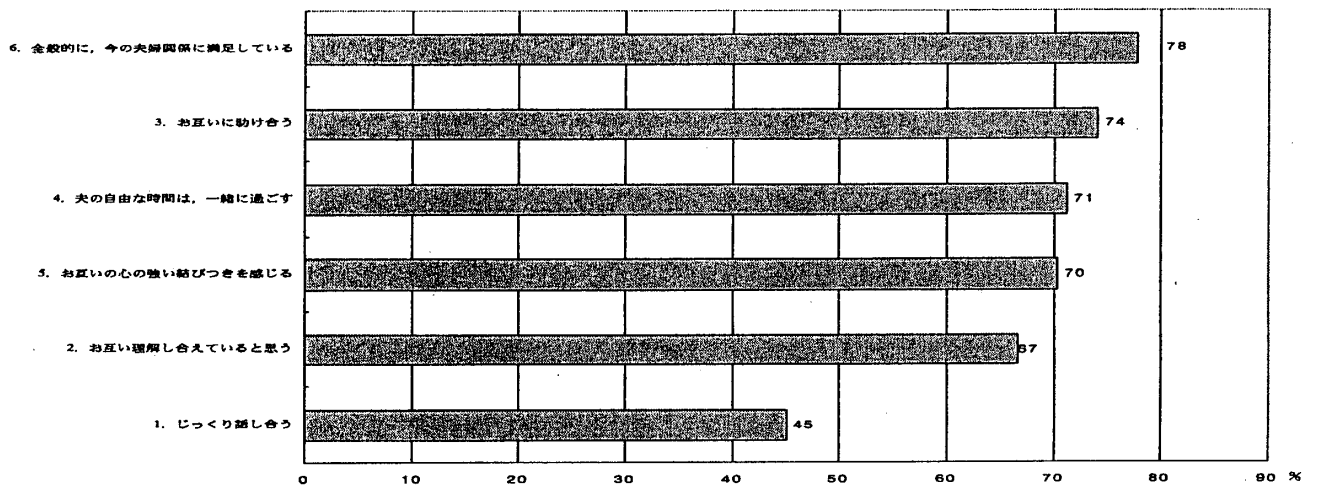


図5 夫によるサポート(しばしば/いつもあった)

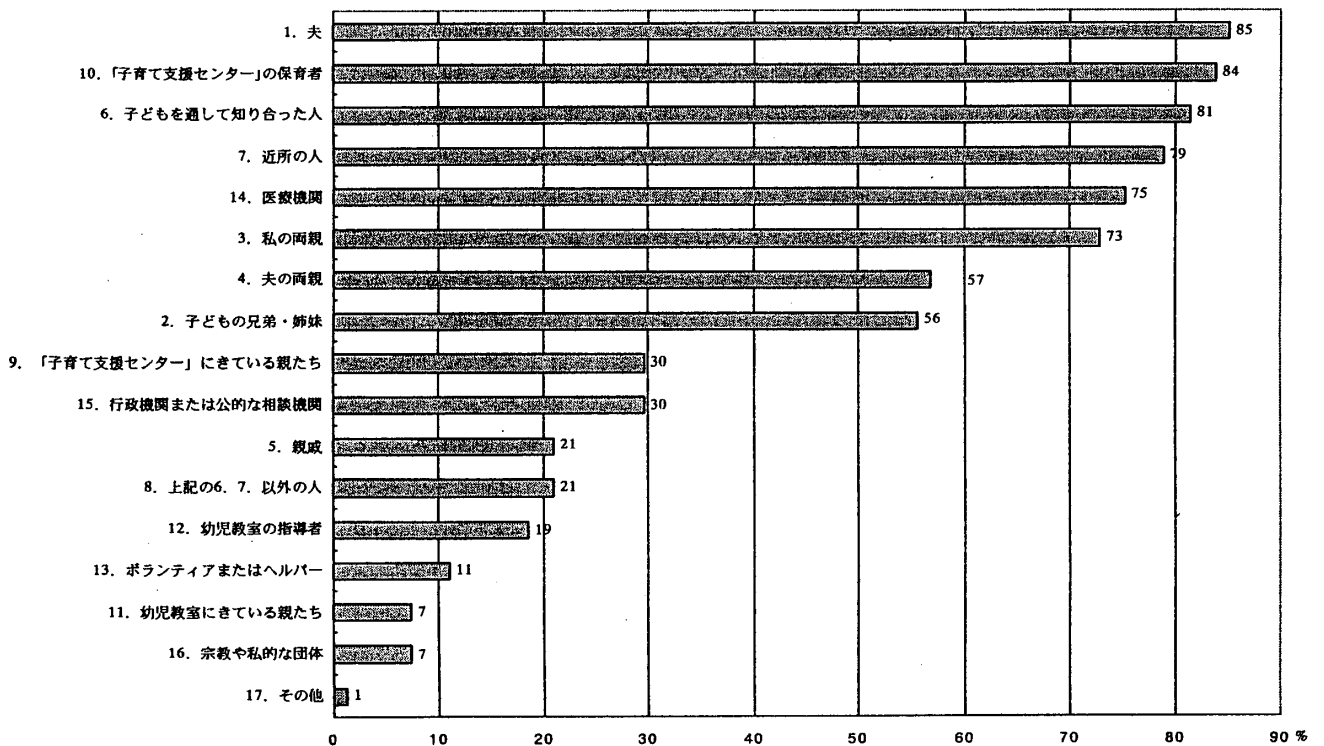


図6 種々のサポート(少し/とても助けになる)

得たことに関しては、Friedrich (1979) の研究結果と一致する。しかし、先述の夫によるサポートの項で述べたように、外面的な部分でのサポートに比べ、内面的な共感といった部分でのサポートがやや希薄であることを加味すると、ほぼ回答が同率であった「子育て支援センターの保育者」や、「子どもを通して知り合った人」にサポートの質的な部分を負うところが大きいと考えられる。これは「子育て支援センター」がサポートとしての場を提供していることに加え、そこでの保育者および他の親たちといったような人的環境による子育ての情報交換や悩み相談、育児に対する自己効力感といった内面的・質的サポートを提供しているといえよう。

また、祖父母と同居していない家庭が91%を占めている割に、「私の両親」が助けになるとする回答が高い回答率を示している。このことから、緊急時や長期不在時等に子ども預けるといった実際的な必要性や、祖父母が近くに在住してなくても電話などの手段でコミュニケーションがとれており、精神的な支えとなっているなどの理由が予想される。そしてこのことは、先述の核家族であることが育児にむしろプラスの影響があるとみる考えにも関連している。

一方、サポート源として低い回答率を示したものに、「行政機関または公的な相談機関」(30%)がある。これは、まだまだ利用に際し煩わしいイメージを抱いている、あまりそのような機関の数がない、機関がさほど認知されていないなどが理由として考えられる。

また、「幼児教室にきている親たち」(7%)、「宗教や私的な団体」(7%)、「ボランティアまたはヘルパー」(11%)、「幼児教室の指導者」(19%)がサポート源としてあまりあげられていないのは、子育て支援センターを利用する母親にとって、それらが、保育所や幼稚園などの保育機関に比べ、優先度が低く考えられていることによると思われる。つまり子育て支援センターにくる子どもは1~3歳が多く、年齢的に幼児教室の利用が必要でないことや、子育て支援センターを利用する母親の持つ早期教育に対する育児観・子育て観といったものがみてとれよう。

6. 実行されたサポート

最後に、どのようなサポートを具体的にどの程度受けたかについて調査した結果を図7に示す。

「しばしば/いつも実行された」と回答した割合の高かった質問項目上位5項目は、順に「私を元気づけてくれた」(58%)、「私と同じような境遇にあったときの話をしてくれた」(54%)、「私の個人的な気持ちを聞いてくれた」(53%)、「私の立場やつらさがよくわかる、と話してくれた」(53%)、「助けが必要なときはいつでも連絡して、とってくれた」(52%)であった。これらの結果から見えてくるサポート源は、子育ての経験者、あるいは子育てに関する専門家である。したがってそれは、先に種々のサポートの項でみたように、子育て支援センターの保育者であり、またそこで知り合う親たちであると考えられる。これらのサポート源が、時にカウンセラーとして受容し、

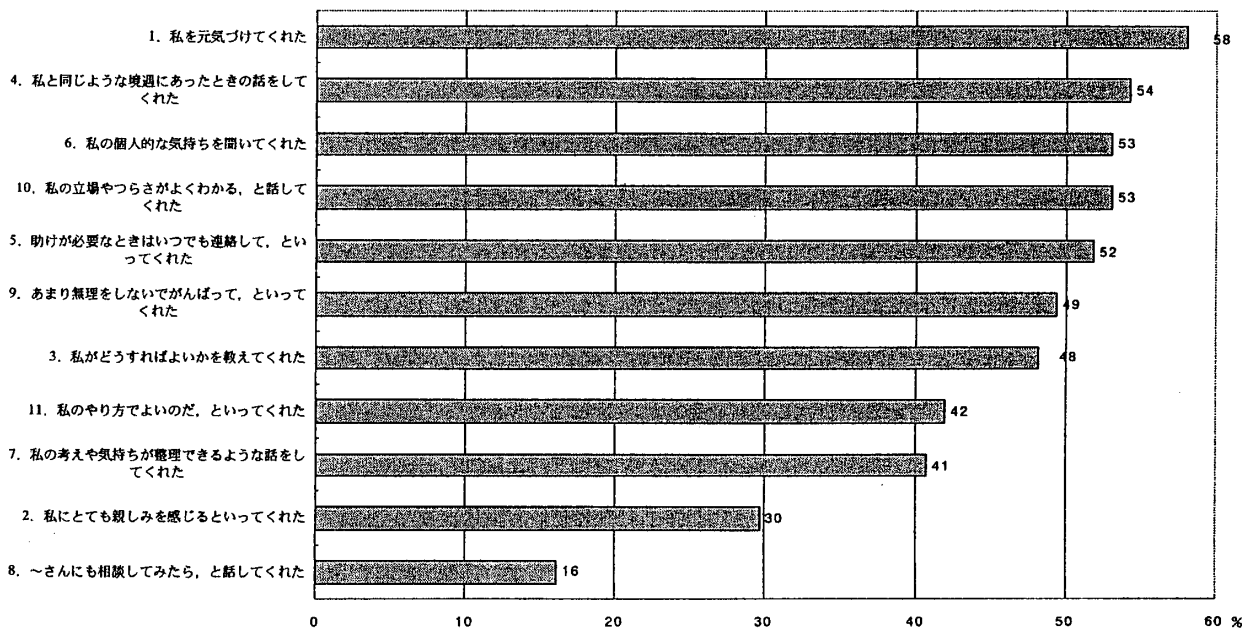


図7 実行されたサポート (しばしば/いつも実行された)

また時に子育ての先輩としてアドバイスするといった精神的支えがあることが考えられた。また逆に「～さんにも相談してみたら」(16%)、「私にとっても親しみを感じる」(30%)が低い項目としてあげられる。これらのサポートがさほど実行されていないのは具体性の伴っていないということが理由として想定される。

IV. まとめ

本調査では、子育て支援センターを利用する母親が、子育てに際し、どのようなサポートを活用し、またどのようなサポートを望んでいるのかを明らかにしてきた。その結果、次のようなことが示唆された。

まず第1に、子育て支援センターという場所(環境)が家庭保育をしている母親たちに対し、先述のようなサポートを受ける上で重要な役割を果たしているということが示唆された。第2には、子育て支援センターを利用する母親は、漠然としたストレスや不安を抱えているが、積極的に日常生活を楽しく送ろうと心がけていることが予測された。そして最後に、母親の持つ育児不安の解消やストレスの軽減に対して、子育て支援センターの保育者、そしてそこを利用している同様な境遇の他の母親といったサポート源による、受容およびアドバイスといった内面的・共感的サポートがおこなわれていることが明らかとなった。また母親は、具体性の強いサポートを必要としていることが示唆された。

引用文献

- Barrera, M. Jr. (1986) Distinctions between social support concepts, measures, and models. *American Journal of Community Psychology*, 14(4), 413-445.
- Barrera, M. Jr., Sandler, I. N., and Ramsay, T. B. (1981) Preliminary development of a scale of social support: Studies on college students. *American Journal of Community Psychology*, 9, 435-447.
- Caplan, G. (1986) Support systems and community mental health. Behavioral Publications. 近藤喬一・増野肇・宮田洋三訳(1979)地域ぐるみの精神衛生。星和書店。
- Dunst, C. J., Jenkins, V., and Trivette, C. M. (1984) The family support scale: Reliability and validity. *Journal of Individual, Family, and Community Wellness*, 1(4), 45-52.
- Friedrich, W. N. (1979) Predictors of the coping behavior of mothers of handicapped children. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 47(6), 1140-1141.
- Hisata, M., Miguchi, M., Senda, S., and Niwa, I. (1990) Childcare stress and postpartum depression—An Examination of the stress-buffering effect of marital intimacy as social support. *社会心理学*, 6(1), 42-51.
- 柏木恵子・若松素子(1994)「親となる」ことによる人格発達:生涯発達の視点から親を検討する試み。発達心理学研究, 5, 72-83.
- 数井みゆき・無籐隆・園田菜摘(1996)子どもの発達と母子関係・夫婦関係:幼児を持つ家族について。発達心理学研究, 7, 31-40.
- 北川憲明・七木田敦・今塩屋隼男(1995)障害児を育てる母親へのソーシャルサポートの影響。特殊教育学研究, 33(1), 35-44.
- 中川泰彬・大坊郁夫(1987)日本版一般健康調査質問紙法の妥当性と信頼性の検討とこの質問紙法の臨床応用。精神保健研究, 34, 110-197.
- 中塚善次郎(1984)障害児をもつ母親のストレス構造。和歌山大学教育学部紀要教育科学, 33, 27-40.
- 中塚善次郎(1985)障害児をもつ母親のストレス構造(II)。和歌山大学教育学部紀要教育科学, 34, 5-10.
- 新見明夫・植村勝彦(1980)心身障害児をもつ母親のストレスについて—ストレス尺度の構成—。特殊教育学研究, 18(2), 18-33.
- 大日向雅美(1985)母性をめぐる現状と問題点。保育研究所編。保育情報, 94, 2-11.
- 佐々木保行・高梨一彦・鈴木敏昭(1990)母親のChild Rearing Burn Outに関する基礎的研究(序報)—「養育態度測定検査」の試作を通して—。鳴門教育大学研究紀要(教育科学編), 5, 59-73.
- Stoke, J. P., and Wilson, D. G. (1984) The inventory of socially supportive behaviors: Dimensionality, prediction, and gender differences. *American Journal of Community Psychology*, 12(1), 53-69.
- 田中昭夫(1994)保育園児の母親への育児援助に関する基礎的研究。保育学研究, 32, 107-115.

謝辞

本調査をまとめるにあたり、データの入力にご協力いただいた広島大学大学院教育学研究科の藤原彩さんおよび増田貴人さんに感謝します。また調査を快く承諾し、便宜を図ってくださった、保育所の園長先生および子育て支援センター担当の先生に深謝申し上げます。

資料

本調査で使用した質問項目

(フェイスシートは本文参照)

・母親の養育ストレス

(なかった・たまに・しばしば・いつも)

1. 子どもを育てることに自信がないと思うことが
2. 子どもの将来のことを考えると不安になることが
3. 早く成長が他の子どもに追いつかないかとイライラすることが
4. 一人で子どもを育てているという圧迫感を感じる事が
5. 子どものことを考えると暗い気持ちになることが
6. 子どもをいとおいと感じられないことが
7. 子どもと外出するのは避けたいと思うことが
8. 子どもをにくらしいと思うことが
9. 毎日子どものことに追われ、世の中の動きに関心をもてなかったことが
10. 子どもを育てることで、私が成長していると感じられないことが

・母親の精神健康度

(なかった・たまに・しばしば・いつも)

1. 心配ごとがあって、よく眠れないようなことが
2. 問題を解決できなくて困ったことが
3. 日常生活はいつも競争であると考えたことが
4. 困ったことがあってつらいと感じたことが
5. 理由もないのに、何かがこわくなったり取り乱すことが
6. 落ち着かなくて、眠れない夜を過ごしたことが
7. たえずストレスを感じたことが
8. 自信を失ったことが
9. 自分は役に立たない人間だと考えたことが
10. 人生に全く望みを失ったと感じたことが
11. 不安を感じ、緊張したことが
12. 生きていることに意味がないと感じたことが
13. 気が滅入って何もすることができないと感じたことが
14. いつもより、いろいろなことを重荷に感じる事が
15. いつもより、気が重くて、憂鬱になることが
16. いつもより、外出する機会が
17. いつもより、自分のしていることに生きがいを感じる事が
18. いつもより、自分の将来は明るいとを感じる事が
19. いつもより、しあわせと感じることが
20. いつもより、元気ではつつとしていたことが
21. いつもより、すべてがうまくいっていると感じる事が
22. いつもより、いそがしく活動的な生活を送ることが
23. いつもより、まわりの人々に親しみや暖かさを感じたことが

24. いつもより、頭がすっきりしてさせていると感じることが
25. 子ども以外に、手をとられる家族がいて大変に思うことが
26. 子ども以外のことで、家族に大きな変化が
27. 家計のやりくりにおわれ、頭が一杯になることが
28. 今すんでいる家はせまく、隣にもきがねすることが

(よくできた・普段どおりできた・あまりできなかった・まったくできなかった)

29. いつもより、能率的に仕事が
30. 何かをする時、いつもより集中して
31. いつもより、容易に物事を決めることが
32. いつもより、日常生活を楽しく送ることが
33. いつもより、まわりの人々とうまくつきあっていくことが
34. 問題があった時、いつもより積極的に解決しようとする事が

・夫婦親密性サポート

(ない・たまに・しばしば・いつも)

1. じっくり話し合う
2. お互い理解し合えていると思う
5. お互いの心の強い結びつきを感じる
4. 夫の自由な時間は、一緒に過ごす
3. お互いに助け合う
6. 全般的に、今の夫婦関係に満足している

・家族サポート

(なし・全く助けにならない・あまり助けにならない・少し助けになる・とても助けになる)

1. 夫
2. 子どもの兄弟・姉妹
3. 私の両親
4. 夫の両親
5. 親戚
6. 子どもを通して知り合った人
7. 近所の人
8. 上記の6、7、以外の人
9. 「子育て支援センター」にきている親たち
10. 「子育て支援センター」の保育者
11. 幼児教室にきている親たち
12. 幼児教室の指導者
13. ボランティアまたはヘルパー
14. 医療機関
15. 行政機関または公的な相談機関
16. 宗教や私的な団体
17. その他

・実行されたサポート

(なかった・たまに・しばしば・いつも)

1. 私を元気づけてくれた
2. 私にとっても親しみを感じるというてくれた
3. 私がどうすればよいかを教えてくれた
4. 私と同じような境遇にあったときの話をしてくれた
5. 助けが必要なときはいつでも連絡して、というてくれた
6. 私の個人的な気持ちを聞いてくれた
7. 私の考えや気持ちが整理できるような話をしてくれた
8. ~さんにも相談してみたら、と話してくれた
9. あまり無理をしないでがんばって、というてくれた
10. 私の立場やつらさがよくわかる、と話してくれた
11. 私のやり方でよいのだ、というてくれた